Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-24

地域医療における尼崎市医師会の取り組み（特集第2部 地域医療）

西村，亮一

(Citation)
神戸大学医学部神緑会学術誌,13:90-92

(Issue Date)
1997-08

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81007521

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81007521

KOBE UNIVERSITY

特集第２部――地域医療

地域医療における尼崎市医師会の取り組み

尼崎市医師会　会長　西　村　亮　一（38年卒）

はじめに

尼崎市は人口約50万人．神崎川を隔てて大阪府に接する７㎞四方の兵庫県最東南の都市である．

この市内に500床以上の公立病院が３ツ，大小の私立病院が28，一般診療所が430，その他６保健所や工場診療所などが存在する．医師会員数は830名．

山もなく谷もなく，市内を流れる大きな川もない．南部の旧い工業地帯と新しく開けた北部の住宅地帯が区別され，大阪市・神戸市という大都市に囲まれている．

こんな尼崎市には熱心に地域医療に取り組むというしっかりとした伝統が根づいている．これは歴史的・文化的・人文的なものも含めての「尼崎市」という地域特性があるためと信じている．堀昌雄（社会党），六島誠之助（前市長），瀬尾摂（現県医会長）などの諸先生をはじめとして，医政活動に熱心な歴代会長など人的な面での地域特性の大きさを無視するわけにはいかない．

以下，特に力を入れている地域医療の実践について簡単に列記してみたい．

１．尼崎市医師会が取り組んでいる地域医療活動

(1)　学校保健

昭和29年２月１日，全国でもはじめとされる画期的な全員校医制に踏み切り，爾来50年以上にわたりその伝統は受け継がれている．

460名Ａ会員全員がどこかの学校医を必ず担当し，地域医療の中での学校保健という理想的な形が打ち立てられている．

(2)　予防接種

昭和43年，それまで主として保健所で行われていた予防接種を“いつでも，どこでも，誰でも”という個別接種を中心とした方式に変更し，かかりつけ医の手ですべて“無料”で行われるという尼崎方式を実現した．しかし，近年，ただ予算的な都合のみで全国に誇っていた“予防に優る治療なし”の牙城が少しずつ後退しつつあるのは誠に残念なことである．

(3)　救急医療

昭和40年代，時間外，特に深夜の急病を診療する医療機関がなく，いわゆる“たらいまわし”という社会問題が発生した．尼崎市はこの問題を何んとかしなければということで，当時手狭になっていた医師会館に加えて市と医師会との共同出資による第三セクター方式の「医療センター」を設立した．このセンターで市内の時間外の一次救急を全て受けることにした．昭和49年の11月より事業を開始している．

開業医が２名ずつペアになって出務し，365日朝６時まで深夜も出務するという画期的なものである．

昭和56年には耳鼻咽喉科を，昭和63年からは眼科を併設した．阪神６市１町を対象とした広域的なものである．

以来，20数年，救急医療におけるトラブルは全くなく，二次救急に絶大な協力をしてくれる私立病院群の活躍もあって，尼崎市民は深夜も休日も安心して過せるようになった．

昭和59年には「救急医療功労者」として大臣表彰を受けた．

(4) 産業保健

尼崎市の最大の地域特性は，多数の中小零細企業が存在することである.尼崎市医師会では，労働基準監督署，労働基準協会とともに三者協議会を構成し，労働者の健康増進，とくに中小企業の労働衛生の向上に貢献してきた.

その受け皿として平成元年に「産業医会」を設立し，その年に労働省の地区労働衛生相談医制度モデル地区に選定された．ここでの地味な努力が高く評価され,全国のトップを切って「尼崎地域産業保健センター」が開設されたのは平成５年４月のことである．今や兵庫県下は云うに及ばず全国にわたる基準監督署管内に次々と地域産業保健センターは設立され，地域保健の中での労働衛生という意識がしっかりと根付きつつある.

(5) 臨床検査センター

公設民営の形で昭和41年開設した．その後，一般医療はもとより公害医療の検査の拠点として一時代を築いたが,その後,検診・健康開発・医療情報などの多機能を備えた複合施設，市民健康開発センター「ハーティ21」へと発展していくこととなる．(後述)

(6) 看護婦の養成

大正14年初頭より尼崎助産婦看護婦養成所として設立されている．戦後，準看の養成機関として独立し，昭和27年に第一期生を迎え入れている．昭和49年には社会の強い養成もあり，その年竣工した第三セクター方式の「医療センター」に拠点を移し，同時に高看の養成も開始した．平成７年まで毎年，準看150名，高看50名を養成し世に送り出している.

平成８年から，母子保健の実習病院の手薄さから，準看の定員を50名減らし，現在，準看100名，高看50名を養成している.

(7) 医師の生涯教育

医師の生涯教育については特に力を注いできた．研修手帖を発行し，毎月第四火曜日は「学術の午後」として，会員皆んなで勉強する日に指定した．一年経てば「修了証」を発行するという生涯教育の制度化を試みた．丁度，昭和50年代，医療はコンピューターの導入と共にデジタル化され，画像診断を中心として急激な変化を起す．我々の試みた制度化は目を見はるばかりの成果を発揮し，尼崎市の地域医療のレベルは急速に高まっていく．そして２つの方向に大きな花を開いていくことになる.

一つは日本医師会が羽田執行部の最大テーマに「生涯教育の制度化」を取り上げ，全国的に波及したこと．もう一つは生涯教育を通じて病診連携・病病連携が急速に芽生えてきたことである.

(8) 地域医療ネットワークシステムの構築

昭和61年に県立尼崎病院が移転新築する話が決まりかけた昭和56年,日医の医政委員会で「公立病院のオープン化の重要性」について発表した．当時の日医は「医師会病院」一辺倒．武見会長から「そんなことをしたら行政の網をかけられるだけだョ」と叱られた．しかし，尼崎市には屋上屋を重ねてハードを増やすより今あるハードを利用してソフトを工夫すべきである．これぞ尼崎市の地域特性だ,と突き進み,厚かった行政の壁も突き破り，ついに公的病院のオープン化に成功した．病院内に「地域医療室」を設けて，セクレタリーを常駐させた．全医療機関にFAXを設置し，市内の460医療機関が全て県立尼崎病院の外来機能を発揮することとなる.

この尼崎方式は厚生省からも高く評価され今や全国津々浦々に拡がっていき，ごく当り前のこととなってしまった．感無量である．「現在,市内15の私立病院もオープン化し，高齢社会に向って質の高い医療の提供体制は整ったと思っている.

(9) 市民健康開発センター

これからの医療は,病気を治すだけでなく「検診」を中心とした「健康開発」と「予防」であ

る．高齢社会に向って，40才，50才台にターゲットをしぼった健やかな老人づくりが必要である．そして福祉・保健と縦横に連携し合った「情報ネットワーク」を持つことである．

こんな目的で市と医師会とが共同出資した財団で設立したのが「市民健康開発センターハーティ21」である．

総工費80億．市の絶大なる理解と協力がなければ完成しない．バブルもはじけかけた平成5年11月やっと設立にこぎつけた．

当初の2年は，この大きなプロジェクトが思うように動かず，加えて地震・不景気などの打撃もあったが，平成8年度は単年度の黒字となり独立採算でやっていくメドがやっとついてきた．

21世紀の医師会活動の拠点として更に充実させていきたい．

(10) 老人保健施設・訪問看護ステーション

在宅医療の推進のためには不可欠のものである．市内の老健施設は地域医師会が主催する運営協議会を設置して，施設と「かかりつけ医」の連携を密なものにしている．協議会は地元市民・福祉関係者・行政などで構成されている．

訪問看護ステーションは現在市内に13個所ある．民間の病院に附属するものと看護協会の運営するものとであり，医師会立そのものはあえて置いていない．看護協会に訪問看護のレベルアップをお願いしながら，医師会は間に立って連絡協議会を主催している．「かかりつけ医」と私立病院のかけ橋の役をステーションにやってもらうためである．私立病院群のオープン化と共に，この方式はますます活性化を帯びつつある．

(11) レセプトの電算処理システム

この4月から保険点数の変更と共にレセプトもA4化された．その事務の複雑なことは大変なものである．今，この煩らわしさから逃れるために姫路市医師会と共にフロッピーでの請求に精力的に取り組んでいる．開業医の若返えりと共に，きっと，数年後には当り前のことになるものと思う．

(12) 国際交流・他都市との交流

尼崎市と姉妹関係にあるドイツのアウグスブルグの医師会と姉妹提携を結んでいる．また，藤岡晨宏会員が総領事を務める中米コスタリカとも交流を持っている．

国内では，365日休日診療所同志ということで札幌市医師会と10年以上にわたっての姉妹提携を，また病院のオープン化のモデル事業をMEDISでご一緒だった鹿児島市医師会とも深い交流を続けている．

これらの医師会活動を通じての内外の交流はお互の切磋琢磨のために誠に有意義なものと考えている．

2． 将来に向って

以上，思いつくままに尼崎市の地域医療について拾い上げてみたが，今一番の問題は会員が医師会は一つとして燃え上ってくれる連帯意識の希薄化である．この解決のために，色んなことを試みてみた．例えば「運動会」．従業員・家族も含めて800名が参加し，毎秋の一大イベントとして定着しかけている．しかし，これだけでは問題の解決になっていない．

この問題の一番の鍵は，2つのピークを持つ会員の年令構成にあるものと考えている．一つのピークは40才，一つのピークは70才．完全な2峰性である．しかし，10年経てば，ピークは大きく変化する．

今，尼崎市では，40才のピークに波長を合わせた地域医療に取り組んでいる．きっと次の世代が，地域医療の伝統を引き継いでくれるものと確信しつつ．